

パシュパティ寺院とサドゥー

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナングール マダーブ ナラエン

カトマンズ市中心部から北東へ約5 kmにあるパシュパティ（動物の主）寺院はヒンドゥ教徒にとっての聖地である。世界文化遺産にもなっていることから外国人観光客も多い。入場料は以前無料だったが、現在ではネパール人以外は料金を払う。寺の本殿はヒンドゥ教徒しか入れないが、ネパール人やインド人であれば仏教徒でも入れる。パシュパティ寺院の主神はシヴァであり、シヴァとはヒンドゥ教の三大神（ブラフマ=創造の神、ビシュヌ=維持の神、シヴァ=破壊の神）の一人である。信者は様々で、その中にはサドゥーと言われる苦行者もいる。全ての信者は一生に一度は訪れたい寺である。約11ハクタルの敷地にある寺院の側に流れる聖なるバグマティ川はインドのガンジス川の上流にあるということで、生ある間はここで沐浴、死しては火葬を希望する人が多い。王族が火葬されるのもここである。パシュパティを生活の場とし、苦行を行うサドゥーも少なくない。



パシュパティ寺院

サドゥーが世捨て人のような修行者と知ったのは何時ごろだっただろうか。

私が幼い頃、両親の店にいて見た光景は忘れられない。何ヶ月もかけてインドから徒歩で巡礼に来たサドゥーたちがはっきりなしに通っていた。薄い衣をまとった者、裸の者、髪や髭を伸ばし固めて

いる者、中には首に蛇を巻きつけ歩いている者もいた。食べ物を彼らに手渡した覚えがある。それからもう少し大きくなりサドゥーをからかったりして遊んだこともある。追いかけてくるから面白くて鬼ごっこのようなものだったかもしれない。苦行中の彼らは太っている人は稀で、痩せて体力がなかったのだろう、追いつかれることはなかった。純粋なサドゥーばかりではないのも何となく分かっていた。その後のヒッピー全盛期にはサドゥーとヒッピーは仲良しだった。自然に帰るという考え方では共通していたのかもしれない。



修業を行うサドゥー

さて、そのサドゥーだが多くは2種類に分けられる。一つはシヴァ神を信仰し修業する者、もう一つは同じヒンドゥ教ではあるが、ビシュヌ神、ラマ神やクリシュナ神を信仰し修業する者である。それ以外に一部は小宗派のシャクティ神を崇拝する者もいる。現在世界中で400～500万人いると言われている。多くはインド各地に住むがネパールでも寺院に行けば見ることができる。生活の術は人々からの施しで成り立っている。片手に托鉢用の入れ物を持ち、もう片方には信仰の印を持つ。施しは功德を積むことにもなるので人々は自発的に行う。施しを受ける側のサドゥーも自分の分を削ってまで

他人に施したりする者もいる。ある日本人がサドゥーから食べ物を貰ったと聞いたことがある。

ホームレスのようにも見えるサドゥーたち、サドゥーの意味はサンスクリット語でヒンズー教におけるヨガの実践者や放浪する修行者である。日本語では「行者」「苦行僧」となる。

サドゥーになるには、数年から数十年を掛けて尊師から厳しい指導を受ける。彼らは定まった住所はなく各地の寺院、街角や河川敷、村はずれや森の中などで野宿をしながら、様々な宗教的実践を行う。俗世を放棄したことを示すため枯葉色の衣服を身にまったり、数珠を首に巻きつけたりする。中には衣服さえ放棄し、ふんどし一枚や全裸でいたりする。髪を切らず髭も剃らず、灰を全身に塗っていることが多い。サドゥーとして認められるには、あらゆる物質的、世俗的所有を放棄し、肉体に様々な苦行を課す修業をしなければならない。基本的には瞑想し解脱を得る修業で極端な禁欲や苦行を自らに課す者も多い。断食や僅かな果物だけで山中に籠もる、数十年もあぐらや片手を高く挙げ続ける、何年も片足立ちを続ける、転がりながら巡礼する、柱の上で生活する等、サドゥーの苦行は様々である。瞑想のためガンジャ（マリファナ）を吸引する習慣を持つ者も少なくない。ガンジャはシヴァ神の嗜好品とされているからである。



ガンジャとサドゥー

昔ヒッピーはサドゥーからマリファナを貰って一緒に吸っていた。癒しを求めて世界中からヒッピーがカトマンズに集まった時代だった。サドゥーのように裸で歩く者もいた。当時、街はヒッピーの溜まり場になりマリファナ等、広く出回

り住民にも悪い影響を及ぼした。その約10年後、やっと政府は麻薬の規制を行い街は規律を取り戻した。



バシュパティ寺院のサドゥー

修業中のサドゥーは尊師の世話もしなければならぬ。宗派により額に描いてある印が違う。シヴァ派は横三本線、ビシュヌ派は縦三本線となっている。信心深い良いサドゥーは“ババ”とも呼ばれ、人の悩みを聞き、癒しを与え、将来の助言をしてくれる。昔の王はサドゥーから助言を受けていたとされる。

ヒンドゥの神々を信じてはいるがサドゥー社会での上下関係は尊師とだけで、基本平等である。

サドゥーになる人の多くは、何らかの事情がある場合が多い。人生を諦めた世捨て人、人生を失敗した人、家庭を上手く築けなかった人、貧困に苦しんだ挙句になる人。カーストから解き放たれたいこともあるだろう、自分を取り巻く全てのしがらみから逃れ、また厳しい生活に入っていく。それでも何にも代えがたい自由を得ることができるのだろう。だが、中にはサドゥーのふりをしている怪しいサドゥーもいて、写真を撮る観光客にお金を要求したりする。形だけのサドゥーになっている者には気を付けたいものである。

クンブメーラの名を聞いたことがあるだろうか。インドで行われる世界最大のヒンドゥ教の祭り数百年毎に行われる。世界中のサドゥーが集まり、ネパールからも大勢のサドゥーが参加する。